彙　　報

○　さきに第13号を以て六年ぶりに復刊したが、種々の都合から復刊の辞も彙報も印刷されなかったのでこゝに本誌休刊中の主な学会の活動を略記しておくことゝする。　昭和20年8月の記録を見ると、昭和18年度は13, 14, 15合併号とし、三省堂の手によって印刷を完了したが製本準備中に戦災のため焼失、昭和19年度は休刊とし、昭和20年度上半期の第16号は編集をおえて文求堂に依頼中、同年下半期の第17号を故小倉進平前副会長の追悼号として編集中であった。　これらはいずれもついに世に出る機会を失い、終戦後、編集をあらたにして第13号を発行した。　それもはじめ新潮書店との契約の下に発足しながら遅延に遅延をかさね、結局は同書店の手をはなれ本学会の名義においてようやく刊行するに至ったのであった。

○　終戦後開催した学会は次の通りである。

第8回大会（21. 5. 18. 東京大学にて）
　中島　文雄：一般文法の構想
　魚返　善雄：言語学者としての林語堂

第15回講演会（21. 10. 5. 東京大学にて）
　小林　英夫：言語美学雑考
　佐久間　鼎：言語機能についてのワダ・サクマ学説

第1回例会（21. 12. 4. 東京文学にて）
　時枝　誠記：国語問題と言語史観

第2回例会（22. 3. 15. 東京大学にて）
　服部　四郎：国語の音韻体系とローマ字のつづり方

第16回講演会（22. 5. 3. 東京大学にて）　国語学会と共同主催
　A. M. Halpern：アメリカ言語学界の最近の発展

第9回大会（22. 5. 17. 慶應義塾大学にて）
　西脇順三郎：自国語と外国語
　安藤正次：国語ウル（売）カフ（買）などの語源について

第3回例会（22. 6. 14. 東京大学にて）
　金田一京助：標準語の問題

第17回講演会（22. 10. 11. 東京大学にて）
　佐々木　達：英語史の構造
　折口信夫：副詞と被送語

第4回例会（23. 3. 13. 東京大学にて）
　川本茂雄：法隆寺学と言語

第10回大会（23. 5. 13. 京都大学にて）
　野上素一：エトルスク語研究の現状
　吉川幸次郎：駢詩について
　宋朱文雄：散文の形態

第20回講演会（23. 10. 23. 東京大学にて）
　中島　健蔵：　国字問題について
　三根谷　徹：　玄應「一切経音義」の反切について

第11回大会（24. 5. 21. 東京大学にて）
　厨川　文夫：　英語史の観点
　東條　操：　方言区劃論と方言周圏論

○　以上のほか、八学会連合に創立以来参加し、大会には毎会代表者を送っている。　本年度第3回大会には、共同課題「火」に辻直四郎氏、一般講演に野村正良・柴田武両氏が講演された。なお、第1，2回大会の講演要旨は　八学会連合編「人文科学の諸問題」として岡書院より刊行された。

○　本誌はすでにお知らせしたような事情から謄写印刷によることになった。　反対の声もかなりあることを承知しながら現状ではやむを得ない措置である点御諒承願いたい。

巻頭の「マイトリ・ウパニシャッドの samdhi について」は戦争中にいただいた原稿で、なお続稿のある予定であったが、こゝでは一応完結した形とされた。　執筆者辻直四郎博士（本会評議員）は東京大学教授、同評議員、同東洋文化研究所長、文部省人文科学分科審議会委員長等々として御多忙の故である。　"Pahlavi ﺑﻬﻠﻮﻱ"の伊藤義教氏は京都大学講師、イラン語を専攻され本誌にもすでにたびたび論文を寄せられた。　京都大学教授泉井久之助博士（本会評議員）の内南洋パラオ語の音韻に関する論文は、本誌第5号及び第7・8号所載の Un coup d'oeil sur la langue tsʼüik，第6号所載の Le système verbal du Chamorro actuel de l'île Saïpan などと一連をなし、近著「比較言語学研究」につながる研究である。　山本謙吾氏は、昭和17年東京大学言語学科卒業、ホ来終戦に至るまで軍務に服し――その間、氏の卒業論文「満文老檔における満洲文語動詞の活用について」は本誌の特輯号として印刷にかゝっていたが戦災のため発行不能となった――復員するや引続き満文老檔の研究に全力を傾注、その中間報告は「東洋語研究」などにつぎつぎ発表しておられるが、本号掲載論文もその一つである。　古代日本語の母音調和を従来と異る観点からとらえようとした村山七郎氏は、ベルリン大学東洋語研究所でアルタイ語学の研究をされ、昭和20年帰朝、現在順天堂医大教授。　東京大学教授服部四郎博士（本会評議員兼幹事長）の "Ōnin-taikei ni çuite"（ローマ字）は国語学会における講演の原稿に「補い」を加えたもので、ローマ字のつづり方は論文末に説明されているように、タ行の チ・ツ・チャ・チュ・チョ が çi, çu, çya, çyu, çyo となっている点が訓令式と異る。　最後に、Halpern博士の本誌第13号所載論文にあらわれた固有名詞の発音を博士の示された音素記号による表記法であらわした表を掲載した。

○　活字による印刷が可能となるまでこの形式が続けられるが、特殊な符号・文字などが自由に用いられる特徴を生かして各分野の特殊論文を掲載し、学会機関誌としての使命を果したい。

永い期間にわたる休刊で発表されなかった論文を続々投稿されんことを望みます。（発表は、和欧文のいずれでも結構ですが、和文の場合は必ず欧文によるレジュメを附すること。）

○ 前にお願した名簿整理用カード（葉書）ぼ着々御送りいただいておりますので、次号に会員名簿を載せ、爾後会員の消息を誌上でお伝えしたいと思います。住所・勤務先などの変更や新著の出版などその都度お知らせ下さい。

會　費

本誌の発行には文部省の出版助成金を受けておりますが、会員数が少ないため、13号14号で会員一人当り実費が約250円となります。同学の士を多数御勧誘下さるようお願いたすと同時に、前に会費200円納入された会員は次号（15号、十二月発行予定）実費を含む昭和廿四度会費として更に200円、振替または小為替にて学会宛お送り下さるようお願します。

日本言語學會　役員（24年11月現在）

会長　新村　出　　副会長：金田一京助

評議員：浅井　恵倫　安藤　正次　泉井久之助
市河　三喜　落合　太郎　神田　信夫
高津　春繁　小林　淳男　神保　格
田中　秀央　千葉　勉　辻　直四郎（会計担当）
東條　操　西脇順三郎　服部　四郎（庶務主事）
松本　信廣　八杉　貞利　山田　孝雄

幹事：池上　二良　井筒　俊彦　大東百合子
小林智賀平　柴田　武　三根谷　徹